

雷

三島由紀夫君は、自分は大の雷ざらいだと言っていた。一度であるが、私もそういう三島君の「雷ざらい」の実態を目撃したことがある。たしか、彼が学習院高等科に進んだ年（昭和十七年）の夏だったと思う。すでに夏休みに入っていたかも知れない。

その頃私は、中等科三年の希望者を入れる寄宿舎の舎監であった関係で、学習院の敷地の一角にある官舎の一つに住んでいた。三島君との個人的接触は、教室ではなく、私の当直の日の舎監室ではじめられたが、後には官舎で会うことが多くなった。

その官舎は、乃木院長時代に建てられたもので、部屋数が十ばかりもある、平家造りのただっぴろい住居であった。南面に広い庭があり、それは高い板塀で校庭と限られていた。

そこには、樺の大木が数本立ち並び、それらの根方を、武蔵野のままの笹や灌木が囲んでいた。雨の後など、長くぬかるみが残るようなその庭は、夏になると蚊の繁殖を助けた。

雷

昭和十七年夏、三島君を迎えたのもこの官舎においてであった。二人は八畳の客間の卓を挟ん

で坐っていた。その時の話題や状況など、今記憶をたどっても、断片的にしか、それも臚ろにしか蘇って来ない。幸い、三島君が、『青年』という雑誌の昭和二十三年四月号に、「師弟」と題する文章を載せており、それにその折の模様を活写した所があるので、それをここに借用することにしたい。

「ある夏の午後、私は清水氏のお宅で王朝時代の女流日記について何か話をきいていたらしい。にわか到庭が蒼ざめて、不吉な突風が繁みをゆるがした。夕立であった。めりめりと空の干割れるような音を立てて雷鳴が近づいて来た。私は性来の雷ざらいで手や足のうちにじつとりと冷汗のにじんでくるのがわかるのである。私には雷がいつか自分に当たるといふ動物的予感がするような気がする。しかし清水氏は久々の雨にさわぎ立つ庭の緑をながめながら、私の顔色のかわったのに気付いていられないいらしかった。——又稲妻がした、と思ったら、頭上へ錐をもみ落すような金属的な響が襲いかかった。

そのとき私ははっと卓の上に向つて自分の死を実感した。まだ空襲のないころである。

——不思議なことにその瞬間、今清水氏と彼女について話していた女流日記の美しい女主人公が、青い絹をさいたような稲妻に射られて死ぬ姿を見たような気がした。現実の日記の主人公は死なずに終るのだが、私の脳裡にはその刹那、明確に雷に打たれて死ぬ美しい女房とその忍苦の

生涯のさまざまな断片とがひらめいたのである。あたかも私自身の体験であるかのように」。

この年からつぎの年へかけて、三島君は、王朝文学の濃い投影を見せた作品を、相次いで発表した。その代表的なものとして、『文藝文化』の十七年十一月号に載せた、「みのもの月」を挙げる事ができる。

この作品は舞台を王朝にとり、登場人物は男と女、二人の間に生まれた娘「夏萩」、それに男の友達で女の新しい恋人「少将」、男の新しい恋人「受領の女」である。書簡体の小説で、女から男へ三通、男から女へ二通、男から少将へ二通、計七通の消息から成っている。古今集や伊勢物語からの引歌が目立っているほか、雷が二度も現われてくる。

とりわけ、最後の、女から男へ贈られた消息には、男の苦悩の果ての憔悴と、それにつづく剃髪と死とが語られており、孤独に沈む女が、自らを「みのもの月」になぞらえながら、浄土の男へ訴えかける形で結ばれている。

その冒頭は雷の描写からはじまるが、それは、さきに掲げた三島君自身の体験の描写と重なって、私をまどわすのである。「おお、あの夜のことでございました。昼のうちはほがらかに遠雷とほいかつちなぞがひびいてをりましたものを、夕刻ちかくなりますますとなほかすかな日ざしをただよはせながら風がおどろ／＼しく吹きつものつてまゐりました。かきくもつてまゐるとみまますあひだに風はい

つしかおとろへてゆくやうでございましたが、まもなくとおと降りしきってまゐりました。雨のおとにまじる稲妻のはためきに、をりをり青ざめて映しだされる庭の面には煙った雨足がものけしきをかき消ちてゆくありさまが、すさまじいばかりにながめられるのでございました。夏萩は大そうおびえてたまさかの稲妻をみてわたくしの膝にかじりついたままおそろしさに顔を伏せてをります。……」遠雷の運んできた雨の音は、これだけに終らず、この最後の消息を一貫して、不吉な伴奏のように響いている。

雷ぎらいの三島君が、その雷を実に効果的に取り入れた作品をいくつか遺しているのも興味深い。そういえば、小高根二郎氏の『蓮田善明とその死』に寄せた「序」も雷で結ばれている。「雷が遠いとき、窓を射る稲妻の光と、雷鳴との間には、思はぬ永い時間がある。私の場合には二十年があつた。そして在世時代の蓮田氏は、私には何やら目をつぶす紫の閃光として現はれて消え、二十数年後に、本著のみちびきによって、はじめて手ごたへのある、腹に響くなつかしい雷鳴が、野の豊饒を約束しつつ、轟いて来たのであつた」。——蓮田善明が生前何に對してあんなに怒つていたか、その「怒り」の意味の理解の経路を、このような美しい比喩で要約している。

これはすでに死の覚悟の決つた三島君の心魂から発せられた言葉であることを思い、感に堪えぬものを改めて感ずるのである。